富山県内小・中・高等学校の校歌における「立山」に関する一考察

森山　義和

はじめに

立山博物館では、要請に応じて県内の各学校や公共施設などを訪問し、出前講座を実施している。2019（令和元）年度は、のべ20回実施した。過去３年間に関しても15回（2016年度）、25回（2017 年度）、19回（2018年度）と実施した。その際、特に小学校においては校歌で「立山」が歌われているか確認し、話の枕としている。しかし、歌詞に「立山」がない学校も少なからずあることに気付いた。実際、校歌の歌詞に「立山」がある学校数は、如何程になるのか、大いに関心を抱いた。

そもそも「立山」ほど富山県民の心に深く根ざしている山はないだろう。その証拠に、「富山県のシンボル、立山」という表現がごく自然に使われ、受け入れられている。また、富山市は、「立山連峰の特等席」としてＰＲしている。この表現には、立山の存在を誇りとしている心情が容易に読み取れる。

富山県民は、このような心情をいつから醸成してきているのであろうか。風土や地位が人を作る、などと言われるが、人間は成長過程における環境に大きく影響を受け、嗜好言動も環境に適応したものとなっていく。つまり富山県民の人となりは、その気候風土の影響を大いに受けており、「立山」が県民の心に深く根ざしていることも無関係ではないだろう。そして、その根源の一つに子供の頃の印象や感情があるであろう。

さまざまな「立山」と県民の関わりのなかでも、小学校・中学校・高校と12年間にわたって歌い続ける学校の校歌の影響は少なくないものと思われる。

本稿では、富山県内の国・公・私立小学校187校（分校含まず）、国・公・私立中学校81校（分校含まず）、公・私立高等学校53校、国・公立特別支援学校15校の校歌を収集し、その中で「立山」がどのように歌われ、どのように表現されているかを分析し、富山県民と「立山」との関わりを考察したい。

１．県内の小・中・高等学校校歌の歌詞中の「立山」

まずは、県内の国・公・私立の小学校と中学校及び高等学校、特別支援学校の状況を確認してみたい。

校数等をまとめると、次の表のようになる。

（表中のデータは『令和元年度富山県の教育』を基に作成した。全ての校種とも国立・公立・私立の学校を含む。小・中学校の分校は対象外とした。高等学校は、全日・定時・通信制を対象とした。）

（下記表中の空欄は設置校なしを示す）

市町村	小学校数	中学校数	県立高校数	私立高校数	支援学校数
朝日町	2	1	1		
入善町	6	2	1		
黒部市	9	4	1		1
魚津市	5	2	3	1	
滑川市	7	2	1		
上市町	7（休校１含）	1	1		
立山町	8（休校２含）	1	1		
舟橋村	1	1			

市町村	小学校数	中学校数	県立高校数	私立高校数	支援学校数
富 山 市	66（国立１含）	28（国立１含） （私立１含）	14	6	8（国立１含）
射 水 市	16（私立１含）	6	3		
高 岡 市	26	12	8	3	4（市立１含）
氷 見 市	12	5	1		
小矢部市	5	4	3		
砺 波 市	8	4	2		1
南 砺 市	9	8	3（分校１含）		1
合　計	187（休校３含） （国立１含） （私立１含）	81（国立１含） （私立１含）	43（分校１含）	10	15（国立１含） （市立１含）

児童・生徒数に関しては、もちろん１校あたりの学校規模において児童・生徒数に差が出る。これは１つの校歌が与える影響の度合いが異なるということを意味しており、分析や評価の際には注意が必要となるところではある。

１－１　県内の国・公・私立小学校の校歌歌詞中の「立山」

まずは、富山県内の国・公・私立小学校の校歌の中に「立山」がどれほど歌われているか確認したい。

この調査における「立山」とは、「立山」そのものだけでなく、「立山連峰」、「北アルプス（アルプス）」、「太刀の山（太刀の峰）」など立山連峰を想起させる文言や万葉集に歌われた山の呼び名等も「立山」として集計し、「立山」の歌詞の中に含めた。但し、「山」や「紫の山」など、どの山を指すのか特定できない「山」とだけ表された歌詞は対象外とした。

各学校のＨＰや学校要覧、校歌関連の書籍[1]を中心に調査を進めたが、その結果は次のようになった。

国立１校、公立185校（休校３校含む）、私立１校の全187校中119校の校歌において「立山」に関する歌詞があることが確認できた。これは、比率として全体の 63.6％になる。やはり、予測したとおり過半数を大きく超える数字となった。

次に、市町村別に校歌の中に「立山」の歌詞がある学校数を見ていきたい。

まず、県東部（富山地区と新川地区）と県西部（高岡地区と砺波地区）に分けた観点で大きくとらえた。すると、校歌の中に「立山」の歌詞がある学校数の差は歴然であった。次の数字を一見すれば分かるほど、明らかに県東部の方が県西部に比べ、学校数も多く、かつ高比率になっている。

県東部…　111校中81校（全ての国立・公立・私立の小学校）：72.3％
県西部…　76校中38校（全ての国立・公立・私立の小学校）：50.0％

次に、上記の小学校を新川地区、富山地区、高岡地区、砺波地区の４つの地区ごとに分けて、見ていきたい。地区ごとの学校数に対する比率でまとめてみると次のようになった。

新川地区…　45校中28校（全ての国立・公立・私立の小学校）：62.2％
富山地区…　66校中53校（全ての国立・公立・私立の小学校）：80.3％
高岡地区…　54校中30校（全ての国立・公立・私立の小学校）：55.6％
砺波地区…　22校中８校（全ての国立・公立・私立の小学校）：36.4％

「立山」に近い新川地区は約62％、そして富山地区は約80 ％と高い比率になっていた。その一方、高岡

地区では、約56％、砺波地区に至っては、約36％と４地区の中でも極端に低い数字となって表れた。
　同じ富山県内でありながら、上記のように地区ごとで比較すると、その比率に大きな差がついていた。その要因を探るため、４つの各地区別にそれぞれの内容を分析してみたい。

①新川地区
　朝日町と入善町、黒部市と魚津市、滑川市、舟橋村、そして立山連峰に一番近い地域である立山町、上市町を含む地区である。ここでは、興味深いことに気付いた。
　この地区では、山々が間近に見えるためか、立山連峰を大きくまとめて「立山」や、素直に「立山連峰」、「北アルプス」としてとらえるだけではなく、個々の山としてとらえる表現が多く見られるということである。例えば、朝日岳や白馬岳、僧ヶ岳、そして剱岳などである。なかには入善町立飯野小学校のように、「白馬・僧ヶ岳」と併記している学校もあった。
　事ほど左様に朝日町、入善町両町の８小学校では、入善町立桃李小学校以外のすべての小学校校歌に、「立山連峰」や「北アルプス」、「立山」としてではなく、個別の山の名前が歌詞の中に出てきている。
　朝日町と入善町を除いた新川地区の市町村の小学校では、上市町立陽南小学校と白萩西部小学校、白萩南部小学校の歌詞に「剱岳」と「剱の峰」、「つるぎの山」が歌詞として出てくる以外、他の小学校の校歌ではほとんどが「立山」や「立山連峰」、「北アルプス」の表現で歌詞に書かれている。その割合は、31校中28校（歌詞に「山」の表記がない小学校３校除く）となり、約90％という非常に高い数字であった。
　これは、環境的要因、まさに地理的条件が大きく影響していると考えられる。朝日町と入善町からでは、立山連峰を全体としてみるには大き過ぎること、立山本峰が見えづらいことなどが要因となり、眼前に広がる個々の山にフォーカスされたと考えられる。このような現象は、他の地区でも同様に見られる。

②富山地区
「立山連峰の特等席」とＰＲする富山市が中心となっており、富山県の中でも「立山連峰」の全体が見渡せる地区である。そのためか県内４地区のなかでも、多くの小学校の校歌に「立山」に関する歌詞が読み込まれている。その比率は、富山市立の小学校では、85.5％という圧倒的な数字となる。
　次に、富山市を市町村合併前の旧地域ごとに見てみたい。旧富山市では、「立山」が歌詞にある校歌を持つ小学校が全小学校数に対する比率で80％を越えている。
　旧上新川郡地域では、旧大沢野町で３校中３校と100％、旧大山町では４校中２校の50％となっている。旧大山町の福沢小学校は「ふたご山」と具体的な個別の山名を取り入れ、小見小学校は「銀の嶺」と抽象的に表現している。
　旧婦負郡地域では、旧婦中町で７校中６校と約 86％、旧八尾町では４校中３校の 75％となっている。旧婦中町の朝日小学校は「嶺」と抽象的に表現している。旧山田村の山田小学校は、地域の山である「牛岳」を歌詞に入れている。旧細入村の神通碧小学校には山を表す表現はない。
　富山市内の小学校の校歌において歌詞中に「山」に関する表記ある学校は、63校中53校で、約84％と高い数字を示している。表記のない３校は、旧富山市内の東部小学校と旧八尾町の樫尾小学校、そして旧細入村の神通碧小学校であった。

③高岡地区
　高岡市と射水市、氷見市が対象となる地域である。射水市は富山市の隣であり、高岡市と氷見市は、距離的には富山地区と比べ少し遠いが、全国的にも有名な「海越しの立山連峰」を望むことができる。
「立山」が校歌の歌詞に書かれている小学校数は多いであろうと予測したが、小学校数に対する比率では、54校中30校で、55.6％であった。県全体の割合と比べても低い数字となった。

次に、高岡地区の３市ごとに見てみたい。高岡市では、26校中15校で57.7％。射水市では、16校中10校で62.5％。氷見市では、12校中５校の41.7％となっている。

しかし、高岡市の小学校のうち、校歌に「山」がはいっていないものは３校のみであった。他の小学校のうち「立山」を歌っていない小学校は８校であり、そのうちの６校では、「万葉集」にも詠われた「二上山」が歌われていた。まさに高岡市と高岡市を代表する山としての「二上山」、そして「万葉集」との強いつながりが感じられる現象である。

射水市では、「立山」以外の山を歌った小学校は１校であった。氷見市では、「立山」が歌詞にない小学校７校中３校が、「二上山」や石川県境の「臼が峰」を歌っている。

④砺波地区

小矢部市と砺波市、南砺市が対象となる地域である。「立山」に距離的に最も遠い地域である。校歌の歌詞中に「立山」が書かれている比率が他の地区と比較すると極端に低くなっている。小矢部市と砺波市では、校歌に「立山」が登場することもあるが、南砺市では福野小学校以外では全く歌詞中に「立山」が書かれていない。他の南砺市の小学校では、遠くの「立山」より、近くの地元の山が校歌の歌詞中に登場する。特に山間部の小学校にその傾向が大きい。

実際、小学校数に対する比率では、22校中８校で、36.4％であった。県内の他の地区と比べて、最も低い数字となった。

次に、砺波地区の３市ごとに見てみたい。小矢部市では、５校中３校で60.0％。砺波市では、８校中４校で50.0％。南砺市では、９校中１校の11.1％であった。

やはり、距離的に遠く、また、実際に「立山」が見えないという視覚的要素が大きいと考えられる。そのため、南砺市の小学校のうち、校歌に「立山」以外の山が入っている学校は、８校中５校で、62.5％。「山」がはいっている学校は８校中７校で、87.5％であった。やはり、見えない「立山」より地元の山が優先されたことが分かる。校歌中に登場した砺波地区の「山」を見てみると、５校が「医王山」で最も多く、続いて「牛岳」と「八乙女山」がそれぞれ２校であった。南砺市に限ると、「医王山」が３校、「八乙女山」と「袴腰山」が各１校となり、まさに南砺市と「医王山」とのつながりが感じられた。

１－２　県内の国・公・私立中学校の校歌歌詞中の「立山」

次に、県内の国・公・私立中学校の校歌の中に「立山」がどれほど歌われているか確認したい。

国立１校、公立79校、私立１校の全81校中50校の校歌において「立山」に関する歌詞があることが確認できた。これは、割合で言うと全体の61.7％にあたることになる。中学校においても、小学校の比率には若干及ばないとはいえ、過半数を超える数字となっている。

次に、小学校と同様に、市町村別に校歌の歌詞中に「立山」がある学校数を見ていきたい。

まず、県東部（富山地区と新川地区）と県西部（高岡地区と砺波地区）に分けた観点で大きくとらえた。校歌の中に「立山」の歌詞がある学校数の比率には、東西の中学校でやはり大きな差があった。

次の数字を見れば、明らかに県東部の方が県西部に比べ、学校数も多く、高比率になっている。

県東部…　40校中30校（全ての国立・公立・私立の中学校）：75.0％
県西部…　39校中20校（全ての国立・公立・私立の中学校）：51.3％

次に、上記の中学校を新川地区、富山地区、高岡地区、砺波地区の４つの地区ごとに分けて、見ていきたい。地区ごとの学校数に対する比率でまとめてみると次のようになった。

新川地区…　14校中９校（全ての国立・公立・私立の中学校）：64.3％
富山地区…　28校中21校（全ての国立・公立・私立の中学校）：75.0％

高岡地区…　23校中15校（全ての国立・公立・私立の中学校）：65.2％
砺波地区…　16校中５校（全ての国立・公立・私立の中学校）：31.3％

やはり、小学校同様「立山」に近い新川地区は約64％、そして若干低くなったものの富山地区も75％と高い比率になっていた。高岡地区でも、約65％と県平均以上の数字を出しているが、その一方で砺波地区は、約31％と他の校種と比較しても４地区の中で最も低い数字となって表れた。

中学校でも、上記のように地区ごとで比較すると、その比率に大きな差がついていた。その要因を探るため、４つの各地区別にそれぞれの内容を分析してみたい。

①新川地区

小学校と同様に、立山連峰を大きくまとめて「立山」や「立山連峰」、「北アルプス」としてとらえるだけではなく、個々の山としてとらえる表現が見られた。朝日町と入善町の中学校では、「朝日岳」と「白馬岳」、上市中学校では「剣の峰（剱岳）」などである。

しかし一方で、「立山」という歌詞がシンプルに使われた学校が多く、歌詞中に「立山」がある中学校のうち、９校中８校となっている点が特徴的である。これは、朝日町と入善町、上市町の３町が個々の山名を具体的に挙げて焦点化していることに対し、立山町を除く黒部市と魚津市、滑川市では、「立山」と抽象的に表している点で対照的である。

②富山地区

富山市が範囲である富山地区は、小学校同様４地区のなかでも、多くの中学校において「立山」に関する歌詞が校歌中に読み込まれている。その比率は、小学校より若干低いが、75％という断然高い数字であった。

次に、富山市を市町村合併前の旧地域ごとに見てみたい。旧富山市では、校歌に「立山」の歌詞がある中学校の比率は、75％であった。

旧上新川郡地域では、旧大沢野町と旧大山町とにある各中学校で歌詞中に「立山」があり、100％であった。

旧婦負郡地域では、旧婦中町で３校中２校と約67％、旧八尾町では２校中１校の50％となっている。旧細入村の楡原中学校も校歌に「立山」が書かれている。

富山市内の中学校の校歌において歌詞中に「山」に関する表記ある学校は、28校中26校で、約93％と非常に高い数字を示した。表記のない２校は南部中学校と片山学園中等部であった。

③高岡地区

校歌の歌詞中に「立山」が書かれている小学校数の比率は、予想に反し県平均を下回ったが、中学校の場合は、65.2％であった。県平均の割合と比べて高い数字となった。

次に、高岡地区の３市ごとに見てみたい。高岡市では、12校中８校で66.7％。射水市では、６校中５校で 83.3％。氷見市では、５校中２校の40％となっている。

高岡地区の中学校のうち、校歌の歌詞に「山」が書かれていないものは３校のみであった。他の中学校の校歌では「山」が歌われており、その比率は、23校中20校で、約87％であった。「立山」関連以外の「山」の表記は「みどりの山」や「雪山」、「山」といった抽象的なもので、個別の山名のような具体的なものは、氷見市立十三中学校の「飯久保山」のみであった。

④砺波地区

小学校と同様に、校歌の歌詞中に「立山」が書かれている比率は、他の地区と比較すると極端に低くなっている。小矢部市は４校中３校で、75％となっているが、砺波市と南砺市では、校歌に「立山」が登場す

る中学校は、各１校であった。砺波市は４校中１校で、25％、南砺市は８校中１校で、12.5％であった。歌詞中に「立山」が書かれていない中学校では、「牛嶽」や「赤祖父山」、「五箇の山」など地元の山が書かれていることが多いが、中学校ごとにそれぞれ別の山であった。なかでも、南砺市立吉江中学校の校歌にある「剱岳」は、地理的に「立山」より遠い山であるが故に、異彩を放っている。

砺波地区では、中学校でも小学校同様に、近くの地元の山が校歌の歌詞中に登場するか、漠然と「山」と表記する傾向が強い。

１－３　県内の公・私立高等学校と国・公立特別支援学校の校歌歌詞中の「立山」

最後に、県内の公・私立高等学校と国・公立特別支援学校の校歌の中に「立山」が歌われている比率について確認したい。

まず、高等学校（全日・定時・通信制）について、公立43校、私立10校の全53校中38校の校歌において「立山」に関する歌詞があることが確認できた。これは、全体の高等学校数の88.4％の比率にあたる数字である。高等学校での割合は、小学校と中学校の比率と比較しても、それらを大きく上回る数字となった。また、特別支援学校に関しては、国立１校、公立14校の全15校中８校の校歌において「立山」に関する歌詞があることが確認できた。特別支援学校のみ比率が、全体の過半数を下回る数字となっている。

高等学校（全日･定時･通信制）と特別支援学校を合わせた割合は、全68校中46校で、67.6％の比率であった。この数字は、小学校と中学校の比率と比較しても、それらを上回る比率である。

次に、これまでと同様に、市町村別に校歌の歌詞中に「立山」がある学校数を確認したい。

まず､県東部（富山地区と新川地区）と県西部（高岡地区と砺波地区）に分けて確認した。校歌の中に「立山」の歌詞がある学校数の比率には、小学校と中学校同様に、東西の学校で大きな差があった。

次の数字のように、明らかに県東部の方が県西部に比べ、学校数も多く、高比率になっている。

県東部…　39校中30校（国立・公立・私立の高等学校と特別支援学校）：76.9％
県西部…　29校中16校（国立・公立・私立の高等学校と特別支援学校）：55.2％

次に、上記の学校を新川地区、富山地区、高岡地区、砺波地区の４つの地区ごとに分けて確認した。地区ごとに、設置されている学校数に対する比率でまとめてみると次のようになった。

新川地区…　11校中７校（国立・公立・私立の高等学校と特別支援学校）：63.6％
富山地区…　28校中23校（国立・公立・私立の高等学校と特別支援学校）：82.1％
高岡地区…　19校中11校（国立・公立・私立の高等学校と特別支援学校）：57.9％
砺波地区…　10校中５校（国立・公立・私立の高等学校と特別支援学校）：50.0％

ここでも小・中学校と同様に「立山」に近い新川地区は約64％、そして富山地区は80％を超える高い比率になっていた。しかもその数字は、中学校のそれと酷似していた。高岡地区では、約58％の比率となった一方で、砺波地区は、50％と他の校種と比較して最も高い数字となった。

上記のように地区ごとに、その比率に差がついた要因を探るため、４地区別にそれぞれの内容を分析してみたい。

①新川地区

今回も泊高校（朝日町）と入善高校（入善町）は､「白馬岳」を校歌の歌詞で歌っており､「立山」はなかった。小学校･中学校･高等学校を通じて一貫していた。剱岳の麓の上市高校（上市町）は、「大立山」と歌っていた。

しかし一方で、立山本峰がきれいに見え始め、近所に立山開山伝説の中心人物である佐伯有頼とゆかりの

「有頼柳」がある新川みどり野高校の校歌には「立山」の歌詞がなく、「僧ヶ岳」が歌われていた。
　特徴として歌詞中で「立山」と素直に歌う学校が多く、魚津高校のみが「アルプス」と大きくとらえた表現であった。
　また、新川地区の11校すべての学校の校歌には、歌詞中に「山」に関する表記があった。

②富山地区
　富山地区では、小・中学校同様４地区のなかでも、多くの学校において「立山」に関する歌詞が校歌中に読み込まれている。その比率は、中学校と同じく82.1％という非常に高い数字であった。
　次に、市町村合併前の旧地域ごとに確認したい。旧富山市では、校歌に「立山」の歌詞がある学校の比率は、23校中18校で、78.3％であった。
　旧上新川郡地域では、片山学園高等部で歌詞中に「立山」はなく、０％である。
　旧婦負郡地域では、旧婦中町で３校中３校と100％、旧八尾町では八尾高校で、校歌に「立山」が書かれており、100％となっている。
　富山市内の学校の校歌において歌詞中に「山」に関する表記ある学校は、28校中26校で、92.9％と高い数字を示した。

③高岡地区
　高岡地区の各３市を確認した。高岡市では、15校中９校で60％であった。射水市では、３校中２校で66.7％であり、氷見市では、氷見高校の校歌の歌詞中に「立山」は歌われておらず、０％であった。
　高岡地区の学校のうち、校歌の歌詞中に「山」が書かれていないものは２校のみであった。その比率は、19校中17校で、約90％であった。
　「立山」関連以外の「山」の表記は、やはり「二上山」が多く４校であった。それらは全て高岡市内の学校であった。やはり、高岡市と「二上山」のつながりの強さがうかがえる。

④砺波地区
　小・中学校の場合と異なり、高等学校と特別支援学校の校歌の歌詞中に「立山」が書かれている比率は、50％と他の地区と比較しても極端に低いとは言えない。
　小矢部市は３校中２校で、約67％となっており、砺波市でも３校中２校で、約67％の比率となっている。これは、高等学校と特別支援学校の県平均の数字を超えている。しかし、南砺市では、校歌に「立山」が登場する学校は、４校中１校で、25％であった。やはり、南砺市では低い数字になっている。
　砺波地区の学校のうち、校歌の歌詞中に「山」が書かれていないものは３校であった。その比率は、10校中７校で、70％であった。
　歌詞中に「立山」が書かれていない学校で、個別の他の山の表記があるのは、南砺市の学校のみであり、「医王山」と「五箇山」であった。

２．校歌の歌詞中における「立山」の形容表現

　１章では、富山県内の小学校187校と中学校81校及び高等学校53校、特別支援学校15校の校歌を収集し、その歌詞中で「立山」が歌われている学校数がどれほどあるのか、その校数や比率について県内４地区、そしてその中の各市町村別及び校種別に調査し、分析した。
　２章では、校歌中に歌われている「立山」がどのように形容され、表現されているかという観点から富山県民と「立山」との関わりを考察したい。

例えば、校歌中の歌詞において「立山」がどのように形容されているか挙げてみると、次のようなものがある。

雲にそびゆる　立山の　さすや朝日の　雪の色……　（富山市立和合小学校）
高くそびゆる　立山の　雄々しき姿　仰ぎつつ……　（富山市立藤ノ木小学校）
空に聳ゆる　立山の　高きを　己が姿とし……　（魚津市立東部中学校）
声を一つに　立山呼ぼう　あの立山を……　（滑川市立滑川中学校）
かがやく雪の　立山に　崇き理想の　影を追い……　（富山県立桜井高等学校）
若きあこがれに　瞳は燃えて　仰ぐ立山　新雪匂う……　（富山県立富山中部高等学校）

以上の学校の校歌を見ても、まさしく各校さまざまに形容している。

そこで、１章で調査した学校を対象に「立山」を形容する表現を調査し、数の多いものをランキングしてみた。その結果は、次のようになった。

１位	仰ぐ	44校（20.7％）
２位	光（光る・光放つ）	27校（12.7％）
３位	そびえる（そびゆる）	24校（11.3％）
３位	高い（高嶺）	24校（11.3％）
５位	雪（白雪）	20校（9.4％）
６位	輝く	16校（7.5％）
７位	雄々しい	８校（3.8％）
７位	雲（青雲・白雲）	８校（3.8％）
９位	映える（映えて）	７校（3.3％）
10位	冴える（冴ゆる）	６校（2.8％）
10位	清く	６校（2.8％）
10位	朝日	６校（2.8％）

（１章で調査した校歌に「立山」が歌われている学校215校中の形容表現のランキング）

上記のように、最も多い形容表現は、「仰ぐ」であった。全体の約21％、1/5を超える数字であった。２位の「光」は、「光を放ち・光さやか」等としても歌われていた。３位の「そびえる」も、「そびゆ・そびえたつ・そびえ連なる」等の表現があった。「高い」は、「高嶺」も含む表現である。５位の「雪」には、「白雪・千古の雪」等の表現があった。同じような表現としては、10位の「朝日」が「朝・朝夕・朝影」等として歌われていた。

その他、10位以下にも「放つ」、「そそり立つ」、「気高い」、「凜々しい・凜たる」、「呼ぶ・呼びかける」、「望み・望む」、「遠き・遠く」、「立つ・立ちそい」、「おごそか」、「わが・われらの」、「東に」、「晴れ・晴れわたる」、「はるか」、「連なる」、「銀・しろがね」等も複数校の校歌中に歌われていた。

以上のように、「立山」を形容する表現を分析すると、大きく２つの種類に分類されることに気づいた。例えば、「高い」や「そびえる」は、日本有数の高山をあらわす形容表現と考えられる。その一方で、「仰ぐ」や「光」に関しては、「仰ぎみる」、「光を放ち・清い光」といった表現から「畏れ」や「神秘的」なものが感じられる。「仰ぐ」や「光」等の表現の背景には、人々の「畏敬の念」または、「信仰」があるのではないだろうか。つまり、「立山」の形容表現の背景に「立山」への信仰があると考えられる。

「立山信仰」は、立山に関わる山岳信仰全般を総称したものであるが、それは、古く「万葉集」のにも詠われている。

有名なものとしては、越中国守の大伴家持が、天平19（747）年４月27日に詠んだ「立山賦」がある。

天離る　鄙に名懸かす　越の中　国内ことごと　山はしも　繁にあれども　川はしも　多に行けども

皇神の領きいます　新川の　その立山に　常夏に　雪降り敷きて　帯ばせる　片貝川の　清き瀬に
朝夕ごとに　立つ霧の　思い過ぎめや　あり通い　いや年のはに　外のみも　振り放け見つつ
万代の　語らいぐさと　いまだ見ぬ　人にも告げむ　音のみも　名のみも聞きて　羨しぶるがね
（万葉集　巻 17 － 4000）

最初の部分を訳してみると、「都遠い地方の国でも名高い立山、越中の国中いたるところに、山はかずかずあるけれども、川はたくさん流れているけれども、国の神様が支配しておられる、新川郡のその名も高い立山に……」となる。

このように、「立山」は古来より尊崇され、遥拝されてきた山岳信仰の山だと分かる。

まとめると、校歌中の歌詞には、素直に景色として美しい山「立山」としてとらえている形容表現と、「立山」を「立山信仰」にまつわる「神秘的」なものとして「畏敬の念」をあらわす形容表現がある。そして、後者は、校歌を歌う子供たちの精神的な面への訴えかけになっていると考えられる。

そこで、「立山」に関するさまざまな形容表現について、「立山」の雄大な美しい自然を表現する「自然の賛美」と、「立山」を模範や目標として、「立山のようになろう」と薦める「精神的価値」とに分けて調べてみた。

＜　自然の賛美　＞

雪（白雪、千古の雪、雪にかがやく、白銀、しろがね、ま白、銀嶺、雪光る）
雲（雲わく、雲海、雲に秀づる、雲おしわけて、雲井はるか）
日（日いずる、日のぼる、日光、陽に映えて、照り映える、旭日はえて）
空（空に連なる、空をつく、青空、晴れる）
立山おろし、山肌光る、山ふところ、東、雄々しい、そそり立つ、天そそり立つ、直く、堅き、動きなき、高き、聳える、雄姿、力、座す、形映える、秀でて高い、高嶺、秀麗

＜　精神的価値　＞

朝（朝、朝日、朝夕、朝影、朝空、朝あけ、朝光）
光（清い光、光あふれ、金光）
天かける、鑑とし、父、千古にかおる、千歳ゆるがぬ、千代にかわらぬ、天にゆるがぬ、永遠、永久、清らな姿、清き姿、輝く、霊峰、霊気を浴びて、秀麗の気、清新の気、屹然、放つ光、心のすがた、ちりにそまらぬ姿、尊き姿、気高い姿、ゆるがぬ姿、心の虹、理想、希望、意気はもえ、はるか、ほがらか、清らけく、さわやか、教えみちびく、たゆみなく、仰ぎ見る、おごそか、自然のさとし、無言、万葉の枕詞、紫匂う

（1）自然の賛美

この分類では、「立山」の高さや、その姿、周りを彩る風景が歌われている。高さや大きさを讃える「雄々しい」や「聳える」、「そそり立つ」という言葉と共に、雪や雲、空や日（日の出）の美しさをあらわす形容表現が多く見られる。

（2）精神的価値

この分類の中では、「立山」を精神の規範として、つまり「立山」を模範や目標とするさまざまな形容表現がある。特に、上記の形容表現のランキング１位「仰ぐ」と、２位の「光」の２つの語句に、富山県民の「立山」への思いが凝縮しているように思う。

「仰ぐ」には、（１．上を向く。　２．尊敬する。うやまう。　３．長上としていただく。　４．教えや命

令・援助などを請う、求める。　５．上を向いて飲む。一気に飲む）[2]という意味がある。ここでの適当な意味としては、高い山を見上げることを示す１．信仰や精神・倫理規範として２．３．４．があてはまるだろう。

平野部から「立山」を眺めると、１．の意味の高い山を見上げる形になるが、現在の地図を見ると下方に「立山」が描かれ、「仰ぐ」という感覚が受けづらい。しかし、江戸時代以降に描かれた古絵図や「立山曼荼羅」と現在の地図と比べると、古絵図や「立山曼荼羅」に描かれた地図は全く反対となっている。「立山」が上で富山湾が下になっている。このように古絵図などで「立山」を「仰ぎ見る」形が浸透していったと考えられる。また、「立山」に登ることも「登拝」と言っていたのである。

ランキング２位の「光」。自然を賛美する「白雪光る立山連峰…」という表現もあるが、「立山の放つ光がさすところ…」、「遠ひかる立山仰ぎ…」、「立山の光さやかにさしてくる…」と、「神秘的」な表現、つまり信仰・霊山として形容する表現が歌詞の中にも多くみられた。

「立山」は「たちやま」とも呼ばれ、その意味と考えられる説の一つに「顕ちやま」＝神の顕現する（はっきりと現れる、あらわし示す）山、との意味がある。それ故、「立山」という山の名そのものが「神の山」であることを示していると言える。

このように、「立山」の形容表現として、「自然の賛美」の形容表現よりも「精神的価値」の形容表現が多くみられる点が、大きな特徴となっている。以上のことからも、富山県内の学校の校歌の背景には「立山信仰」が根付いていると言えるだろう。

校歌の歌詞中の「立山」は、校歌に歌われることが多い「山」、「川」、「海」、「平野」等の風景の中の美しい「山」としての歌われ方以上のとらえ方をされている。「神の山」として児童・生徒が向かうこれから（未来）のあるべき姿を指し示し、教え導く役目をしつつ、加えて「あの立山のように…」と歌われる「目標」にもなっているのである。

３．校歌の歌詞における「立山」に関して４地区から見える傾向

１章と２章において、校歌の中に「立山」に関する歌詞がある学校数とその比率、そして「立山」の形容表現について考察してきた。

本章では、上記の考察をもとに４地区の傾向を考えてみたい。まずは、１章で検討してきた全校種のまとめをしておきたい。富山県内の対象とした学校数、全 336 校中 215 校の校歌において「立山」に関する歌詞があることが確認できた。これは、全体の約64％の比率になる。やはり、全校種を通じて過半数を大きく超える数字となった。この過半数を超える比率は、「立山」に対する富山県民の思いや「立山愛」「立山をシンボル」としてとらえる県民性の表れと言えるであろう。

これは、過去と比較するとどのような数値であるのか。1979（昭和54）年に調査された「校歌に立山および立山連峰を詠じている学校数」[3]のデータと比較したところ次のような結果となった。

県内の国・公立小学校の校歌の中に「立山」の歌詞がある学校数は、全312校中178校であった。全体での比率は57.1％で、2019年時点の63.6％には及ばなかった。

県内の国・公立中学校の校歌の中に「立山」が歌われている学校数は、全76校中58校であった。全体での比率は、76.3％で、2019年時点の61.7％を超える数字となった。

最後に、県内の公・私立高等学校と国・公立特別支援学校の校歌の中に「立山」が歌われている比率について確認した。

まず、高等学校（全日・定時・通信制）については、全公立高校44校中36校、全私立高校７校中６校であった。全体の比率では全51校中42校で、82.4％であり、2019年時点の88.4％には及ばないものの非常に高い

数字であった。

次に、特別支援学校に関しては、全７校中６校であった。比率は85％を超え、2019年時点の53.3％を大きく上回った。

対象とした全校種の学校数、全446校中282校の校歌において「立山」に関する歌詞があった。これは、全体の63.2％の比率になった。40年間で、中学校と特別支援学校での比率が低くなったが、全体の比率では、ほぼ同じ数値であった。

そもそも校歌には、その学校のある自然環境や歴史的背景、学校の教育目標が歌い込まれている。入学式や卒業式、各学期の式などさまざまな機会で歌うことで、学校への所属感・連帯感を高め、郷土に対する愛情を育むことを目指している。

それ故、校歌に歌われる環境要素の地理的分布と学校の位置関係は密接な関係があり[(4)]、学校のある地域の地域環境を明らかにする必要がある。改めて富山県の地形を見てみると、北に富山湾を有し、東に立山連峰、南に飛騨山地など三方を急峻な山々に囲まれ、湾を抱くように平野が広がっている。これらの景観要素は、校歌の内容に大きく反映されていると考えられる。特に「山」に関する景観要素については、調査した全学校数336校中302校で、約90％と高い比率になっている。また、その中で「立山」に関する歌詞がある学校は、302校中215校で、71.2％と最も高い数値であった。

そして、校歌中に「立山」に関する歌詞がある学校のほぼ全てが、立山連峰の可視領域内に分布していた。牛岳や医王山が歌詞中にある学校は、立山連峰の可視領域外に位置している学校のみであり、立山が優先されて歌われていた。その一方、二上山が歌詞中にある学校は、立山連峰と二上山の可視領域内に分布しており、校歌中にこれら二つの山を同時に、または比較しながら歌っている学校もあった。

このように県内の学校の校歌中には「山」に関する表現が多い。しかし、「山」の表現が校歌にない学校もある。その特徴、傾向について分析した。

３－１　小学校における「山」の表現について

新川地区で「山」の要素が歌詞になかった３つの小学校は、入善町立桃李小学校と滑川市立田中小学校、滑川市立西部小学校である。これらの小学校について考察する。桃李小学校は山本光代の作詞である。この小学校の場合、統合した旧横山小学校と旧椚山小学校の歌詞の要素を入れることなく、校名の「桃李」を強調する歌詞となっている。

他の２校の滑川市立田中小学校と西部小学校（旧西加積小学校）についてみてみる。作詞者は、２校とも高島高である。田中小学校校歌の制定は、1949（昭和24）年であり、西部小学校は改称前の西加積小学校から校歌は同じで、1954（昭和29）年である。同時期に制定された他の小学校の校歌の多くに「立山」などの山に関わる歌詞が入る中、異彩を放っている。作詞者の高島高は、４校作詞しているが、田中小学校の隣の地域の寺家小学校では、「立山」を使用している。あえて同時期のため、隣の小学校との違いを表したとも考えられる。

富山地区で「山」に関する表記のない３校のうち樫尾小学校と東部小学校の作詞は寺津幸治が担当している。もう１校の神通碧小学校は、伊藤敏博である。３校に共通する特色は、周りの自然環境よりも小学校の児童に向けての歌に重点が置かれている点であった。

高岡地区は、８校と４地区の中で最も多かった。射水市が４校、高岡市が３校、氷見市が１校である。

射水市の学校は太閤山小学校と中太閤山小学校、放生津小学校と新湊小学校であった。それぞれの作詞者は、太閤山小学校が伊藤敏博、中太閤山小学校は渡辺孝、放生津小学校は島木茂樹、新湊小学校は相馬御風である。太閤山小学校と中太閤山小学校に関しては、周りの自然環境よりも学校のかくありたい姿に重点を置いた歌詞になっている。放生津小学校と新湊小学校は、やはり海が近いことから海を中心とした歌詞、特に「奈呉の海」がキーワードとなっている。伊藤の作詞では、神通碧小学校の場合も山の要素が入っていな

いことが特色と言えるであろう。

高岡市は、横田小学校と川原小学校、古府小学校であった。作詞者は、横田小学校と川原小学校が小林守直、古府小学校は鴻巣盛広である。横田小学校と川原小学校は、「千保川」を中心とした歌詞となっており、古府小学校は「奈呉の海」と「万葉」をキーワードとしている。

氷見市は、明和小学校で、作詞者は高峯正冏である。学校生活での子供たちのあるべき姿を歌っている。

砺波地区は、小矢部市立石動小学校と砺波市立庄東小学校の２校である。作詞者は、畷文兵と渡辺英二である。両校ともに子供たちのあるべき姿を歌っている。

３－２　中学校における「山」の表現について

新川地区で「山」の要素が歌詞にない中学校は２校で、入善町立入善西中学校と魚津市立西部中学校であった。入善西中学校の作詞者は田原長五郎で、西部中学校は前田普羅である。どちらも学校の環境、特に西部中学校の場合は「小津の浦」を歌い、生徒の理想の姿を歌っている歌詞が中心であった。

富山地区で「山」に関する歌詞のない中学校は、富山市立南部中学校と片山学園中等部であった。それぞれの作詞者は、高瀬重雄と廣瀬久雄である。両校ともどのような学校で、生徒は何をどのように学ぶかを説明する歌詞が中心になっている。

高岡地区は３校であった。高岡市立南星中学校と伏木中学校、氷見市立西部中学校で、それぞれの作詞者は、廣川親義と堀田善衛、そして清水信行である。南星中学校の歌詞は、生徒のあるべき姿と「大高岡」への誇りが歌われている。伏木中学校の歌詞は、壮大で「風」をキーワードに「広い世界」に羽ばたくことを勧めている。西部中学校の歌詞は、「世界平和・正しさ・強さ」を重点に生徒のあるべき姿をあらわしている。

砺波地区は、小矢部市立津沢中学校のみである。作詞者は前田普羅で、「あみなす歴史二千年」や「世界平和」が歌詞中にある壮大な歌となっている。

３－３　高等学校における「山」の表現について

県内の高等学校において「山」の要素が歌詞にない学校は２校で、高岡南高等学校と片山学園高等部であった。高岡南高等学校の作詞者は谷川俊太郎で、片山学園高等部は廣瀬久雄である。

高岡南高等学校の校歌は、「生命の流れ」と「歴史の歩み」、「未知をたずねて」といった歌詞で過去から未来に続くスケールの大きな校歌となっている。

片山学園高等部の校歌は、どのような学校で、生徒は何をどのように学ぶかを説明する歌詞が中心になっている。

以上の考察から、「山」に関する歌詞のない学校の特徴として、次の点が挙がられる。

まず、「山」にかわる自然環境が近くにあること。「小津の浦」や「奈呉の海」、「千保川」などがこれにあたると考えられる。次に、生徒の理想像や活動を強調していること。「何をどのように学ぶ」を強調する歌詞となる傾向がある。また、「世界」や「歴史」、「未来」など壮大な歌詞もあった。これらは、中学校と高等学校で見られる傾向である。最後に、作詞家の特色も挙げられよう。同一人物が複数の「山」の要素がない校歌を作詞している。例えば、高島高、寺津幸治、伊藤敏博、小林守直、廣瀬久雄、前田普羅である。高島高や廣瀬久雄、前田普羅、小林守直のように３校以上作詞されている中での２校程度ならば諸事情が考えられる。寺津幸治と伊藤敏博の場合は、「山」に関する表現がないことが特色となっている。

調査の過程で興味深い学校を発見した。２番までの校歌で１番、２番の歌詞にそれぞれに「立山」が歌われている学校があったのである。その学校は、立山町立立山芦峅小学校と富山市立太田小学校の２校である。

立山芦峅小学校の場合、やはり「立山」を含む地域であり、江戸時代から「立山登山」の玄関口としての歴史に思いを馳せれば、当然とも言える。しかし、２番は「立山芦峅校」が歌詞になっており、校名を歌うかたちになっている。

太田小学校の場合は、２番までの校歌の１番と２番の冒頭に「立山」が歌われている。１番には「立山近い　緑田の……」、２番には「立山仰ぐ　みのりの田の……」と、両方とも「田」と組み合わせて歌われている。確かに太田小学校周辺からの立山の眺望は素晴らしいものがあり、大きな影響を与えたのであろう。

４．作詞者と「立山」の歌詞

３章まで富山県内の学校の校歌と「立山」の関わりについて、視点を変えて分析してきた。本章では、学校校歌の生みの親とも言える作詞者について調べ、「立山」との関わりを探ってみたい。

調査した富山県内の学校336校の校歌の作詞者と「立山」の関係について調査した。

まず、336校の校歌の作詞者を作詞数の多い順で並べ、「立山」に関する表現との関係を調べた。

336校の校歌の作詞には、学校としての作詞や作詞者不祥を除き、175人の方が携わっている。そのなかで、一番多くの学校の校歌を作詞しているのは、大島文雄であった。その数は、69校。圧倒的に多い数字である。２位の和田徳一が14校。３位の中山輝は12校。４位の高瀬重雄が６校、５位の高島高が５校と続く。

作詞者のうち、大島文雄と高瀬重雄、和田徳一の各氏は元富山大学教授と上位５名のうち３名は富山大学関係者であった。

高島高は富山の風土に根ざし優れた山岳詩を残した詩人、中山輝は越中おわら節にも詩が歌われている民謡詩人である。

出身地は、和田徳一が徳島県生まれであった。富山大学に赴任し、富山県における万葉集研究の大家となった。和田以外の４人は、全員が富山県出身であった。

１位の大島文雄は、県下336校中69校、全体の20.5％の学校の校歌を作詞している。その内訳は、小学校32校、中学校24校、高校・特別支援学校13校である。それらの校歌の歌詞中で、「立山」が書かれている学校数は69校中59校であり、比率にすると約86％の校歌に「立山」が歌われている。加えると、和田が14校中10校で、71.4％の比率。中山は12校中８校で、66.7％の比率と３人とも高い数値を示していた。また、上位３人の作詞した学校数は、95校であり、県下の学校数の中の比率では、28.3％と３割近い驚異的な数字となっている。

富山県の学校の校歌をこれほど多く作詞した大島文雄、和田徳一、中山輝とはどのような経歴の人物なのか、調べてみた。

①大島文雄

大島文雄は、1902（明治35）年に富山市岩瀬に生まれた。1926（大正15）年に東京帝国大学文学部国文科を卒業し、1927（昭和２）年に旧制富山高等学校教授、1949（昭和24）年に富山大学文理学部教授となった。1968（昭和43）年に退官し、同年富山女子短期大学教授に就任した。その後、1970（昭和45）年に富山市教育委員長を、1982（昭和57）年からは富山県芸術文化協会長を務めた。1991（平成３）年、89歳で死去した。富山県の芸術・文化に広く熱心な活躍を続け、その間多くの著作もある。もちろん富山県内の数多くの学校の校歌を作詞したことでも知られる[(5)]。

大島は、特に 1950（昭和25）年の48歳から数多くの校歌を作詞しており、88歳まで作詞した校歌の数は驚異的である。

大島は校歌作成の依頼を受けると、現地まで足を運び、その学校を取り巻く自然環境を身をもって知り、感じ取ってから作詞作業に入ったといわれている。大島が校歌を作詞するにあたり、大切にしていたことを大島の随筆集『萩咲きぬ』[(6)]から紹介したい。

> 私が何よりも大事に思ったものは郷土の自然風土である。私はこの郷土に生まれ、育ち、生活をしてきた。その越中の自然の、根深さ、力強さ。私はそれに抱かれそれに打たれてきた。この感動をいくらか

でも表現してみたいと思った。

それは、私の力に余るものではある。だが、郷土の私が作るとなれば、それが私の使命のようにおもわれてくる。

大島の作詞の基本姿勢は郷土の自然風土を表現し歌い込むことであった。

例えば、大島が「立山」を校歌の歌詞に書かなかった学校についてみると、高岡市立万葉小学校と博労小学校の２校は、共に「立山」ではなく、万葉集で有名な「二上山」が歌われている。学校の位置関係を確認すると、２校とも「二上山」の麓であった。

また、南砺市立山田中学校と城端中学校は共に山間部の学校で、位置的に「立山」は見えない。このことからも、学校を取り巻く自然環境を把握したうえで作詞していることが実証される。

大島は校歌づくりの喜びについて、『追想録』(7)に次のように記している。

校歌づくりは歌詞が下手でも、おもいを込めて作っただけに、若い人たちがうたってくれるのを聞くことは嬉しいものです。特に小学校の校歌を作るのはなかなかむつかしいものですが、披露式に子供達が講堂一杯にわたり一生懸命にうたうのは、感動して涙ぐむこともありました。何といっても小さな子供の魂はきれいですから、それが本気になってうたってくれることは貴いことと思います。校歌を作る喜びというものは、皆さんがうたってくれるのを聞くことにあると思っています。

②和田徳一

和田徳一は、1900（明治33）年に徳島県に生まれた。富山大学教授、県内の万葉集研究の大家として知られる。1957（昭和32）年から富山大学教育学部附属中学校長を務め、1960（昭和35）年に再選された。1980（昭和55）年に80歳で死去した(8)。

和田が最初に校歌の作詞をした校歌は、1938（昭和13）年に制定された旧婦負郡山田村・現富山市の山田小学校のものである。これが記録に見られる最も古いものである。和田の校歌の作詞活動は、富山大学教育学部に勤務していた 1951（昭和26）年から、富山大学教育学部附属中学校長を務めた 1957（昭和32）年までに集中していた。和田が、県内の万葉研究における第一人者として、富山大学教育学部教授、富山大学教育学部附属中学校長として最も充実した日々を送っていたであろう時期に、数多く作詞していたと考えられる。

③中山輝

中山輝は、1905（明治38）年に中新川郡立山町福田に生まれた。郷土詩壇の名士であり、1957（昭和32）年11月から 1958（昭和33）年１月まで北日本新聞社代表取締役を務めた。1977（昭和52）年に死去した(9)。

中山が作詞した富山県内の学校の校歌の制定年を見ると、1950（昭和25）年の40代後半から50代前半にかけて、作詞活動が集中していた。これは、詩人・民謡作家として充実していた時期と重なっていた。

以上、３人の経歴を調べてみると、３人共に校歌の作詞活動が、堀江が述べるように(10)、太平洋戦争後、新しい教育体制が発足し、新しく校歌を制定する必要性や気運が高まりつつあった時期に集中していたことが分かった。

５．校歌中の歌詞「立山」及び学校教育の影響について

ここまで、校歌の歌詞中の「立山」について考察してきた。最後に、「立山」の歌詞が入った校歌が子供たちに与える影響について考察したい。

今回、校歌を分析するにあたり、2019年度に出前講座を受講した学校の児童・生徒にアンケートを実施した。回答した学校と児童・生徒数は、小学校９校、児童（６年生）573名と、高校１校、生徒（１年生）151名である（令和元年10月20日～11月20日までの期間に実施）。

小学校の場合、「立山について何から知ったか」という質問項目（複数回答可、全回答数1210）に対する回答には、次のような結果が出た。

最も多かった回答は、「学校の授業（社会科・総合的な学習など）で学習した」で、25.6％（のべ310人）。次が「家族から教えてもらった」で、23.6％（のべ286人）。続いて「校歌（歌詞）から」が、16.0％（のべ194人）。そして「インターネット」が15.4％（のべ186人）。「テレビ・ラジオ番組」で、11.1％（のべ134人）であった。「校歌（歌詞）から」は、２校の校歌中に「立山」に関する歌詞がないので、その２校分を除いた比率は 17.5％であった。

同様の質問で高校の場合（複数回答可、全回答数276）では、最も多かった回答は、「学校の授業（社会科・総合的な学習など）で学習した」で、39.5％（のべ109人）。次は「家族から教えてもらった」で、20.7％（のべ57人）。続いて「校歌（歌詞）から」が、14.9％（のべ41人）と小学校と同じ回答順であった。その後は「テレビ・ラジオ番組」が 8.7％（のべ24人）。「本・雑誌」で、7.6％（のべ21人）であった。

質　問　項　目	小学校回答	高校回答
学校の授業（社会科・登山学習などで学習した）	25.6%	39.5%
家族から教えてもらった	23.6%	20.7%
校歌（歌詞にあった）	16.0（17.5）%	14.9%
インターネット	15.4%	7.3%
テレビ・ラジオ番組	11.1%	8.7%
本・雑誌	5.8%	7.6%
友達に教えてもらった	1.7%	1.1%

立山について「家族から教えてもらう」ことが最も多いと推測していたが、小学校、高校ともに「家族から教えてもらう」ことよりも、授業（小学校の場合、授業でインターネットを使って調べたことも加わる）や校歌など、学校生活の中で知ることが多いことが分かった。その比率（「学校の授業」と「校歌」、「インターネット」を合計した数値）を見ても、小学校で 57.0％、高校で 61.7％と過半数を超えていた。

小学校では、４年生で副読本『きょう土のすがた』(11)を使い、富山県のことを学ぶ。その際、県内の「特色ある地域の人々の生活」(12) の例として、立山について学ぶ。これが大きな役割を担っていると考えられる。確かに、今回の対象校では、すべて６年生が立山登山を行うので、６年生での総合的な学習や、登山学習の占める役割は大きいだろう。しかし、県内の小学４年生全員が立山についての学習に取り組んでいることは見逃せない事実であり、子供たちの心に残っていると考えられる。また、高校生の回答の上位に「本・雑誌」とあるが、これは県内の高校１年生全員に配られる高等学校郷土史・日本史学習補助教材『高校生のためのふるさと富山』(13)の影響が大きいと考えられる。

今回のアンケートにおいて「立山のイメージ」についても質問した。多かった回答は、小学生では、「雄大」、「高い」、「そびえる」で 26.0％、次が「雪」で 13.5％であった。高校生では、「雄大」、「高い」、「そびえる」で 27.2％、次が「雪」で 20.8％であった。このイメージは、校歌の歌詞によく出てくる表現である。

小学３・４年生では、書き初めでも「立山」が登場することが多い。過去20年間でも７回も「立山」に関する言葉（「雪の立山」、「立山の光」など）が書き初めの題材となっている。

また、立山登山やそれに関する学習も大きく影響しているだろう。小学４年生で学んだことを更に発展させ、実際に登山することで強く思い出に残ると考えられる。平成30年度、県内で立山登山を実施した小学

校数は、93校であった[14]。登山を実施した小学校が135校であったので、約69％の比率であった。平成14年以降、立山登山を実施した公立の小学校の比率は、55％前後が続いていた。しかし、平成21年以降、立山登山の実施校の比率は上昇し、平成30年頃には70％前後になっている。

このように、学校生活の中のさまざまな場面で、子供たちは「立山」と関わりをもち、意識せずとも心の中に「立山」の存在を確立させているのである。まさに、学校生活を通して「立山」を、大きくとらえると郷土を愛する心を育んでいるのである。その集大成が、「富山県のシンボル、立山」というフレーズを、我々が違和感なく受け取り、至極当然に使うことにあらわれているのではないか。

まとめ

今回、県内の学校の校歌中の「立山」に関する歌詞を切り口に、富山県人の心に大きな存在感を持つ「富山県のシンボル、もしくは誇り、立山」が如何に形成されていくのかを探った。その結果、学校教育の果たす役割の大きさに気付いた。しかし一方で、家族からの教えも確固として残っていた。以上から、「立山」の存在を誇りとし、「立山」を愛する心情は、家庭及び学校生活のあらゆる場面で育まれ、長い年月をかけて醸成されていくことが分かる。

上記の心情は、時代を超えて受け継がれているものである。この「立山」への思い（「こころ」）を伝える意匠（「カタチ」）の役割をしているものの一つが校歌と言えるであろう。この校歌（「カタチ」）によって、個人的には口ずさむ度に、いろいろな思い出が懐かしく蘇り、世代を超えて、美しい自然に恵まれたふるさと富山や、ふるさとの誇り「立山」に思いを致す。そして時代を超えて、その思い（「こころ」）は繋がっていくのである。このように考えると、校歌を歌い続ける意義は、個人の感慨のみならず、地域への、富山県への愛着を繋げていくことにあると言えるであろう。

［附記］

本稿作成にあたり、県内小・中・高等学校の校歌のデータ化を進める際、富山県教育記念館と富山県総合教育センター、富山県教育委員会および東部教育事務所、西部教育事務所、立山町教育委員会、上市町教育センター、富山県書写書道教育研究会にご協力をいただきました。

また、多くの学校の先生方には、アンケートや問い合わせにご協力いただきました。

ここに記して、皆様のご厚意に感謝いたすとともに、御礼申し上げます。

［註］

（1）小澤達三『富山県校歌全集』（パラマウント社、1979年）
小澤達三『富山県校歌全集・余滴』（パラマウント社、1979年）
富山県ひとづくり財団・富山県教育記念館編『校名・校章・校歌と教育への期待』（2010年）
堀江英一「富山県の小学校校歌をつくった人たち～作詞者及び作曲者の観点から～」（『富山国際大学子ども育成学部紀要　第５巻』、2014年）
以上を参考とした。不足する部分に関しては、富山県教育委員会東部・西部教育事務所への照会もしくは当該校からの回答にて補足した。

（2）新村出編　『広辞苑　第六版』（岩波書店、2008年）15頁。

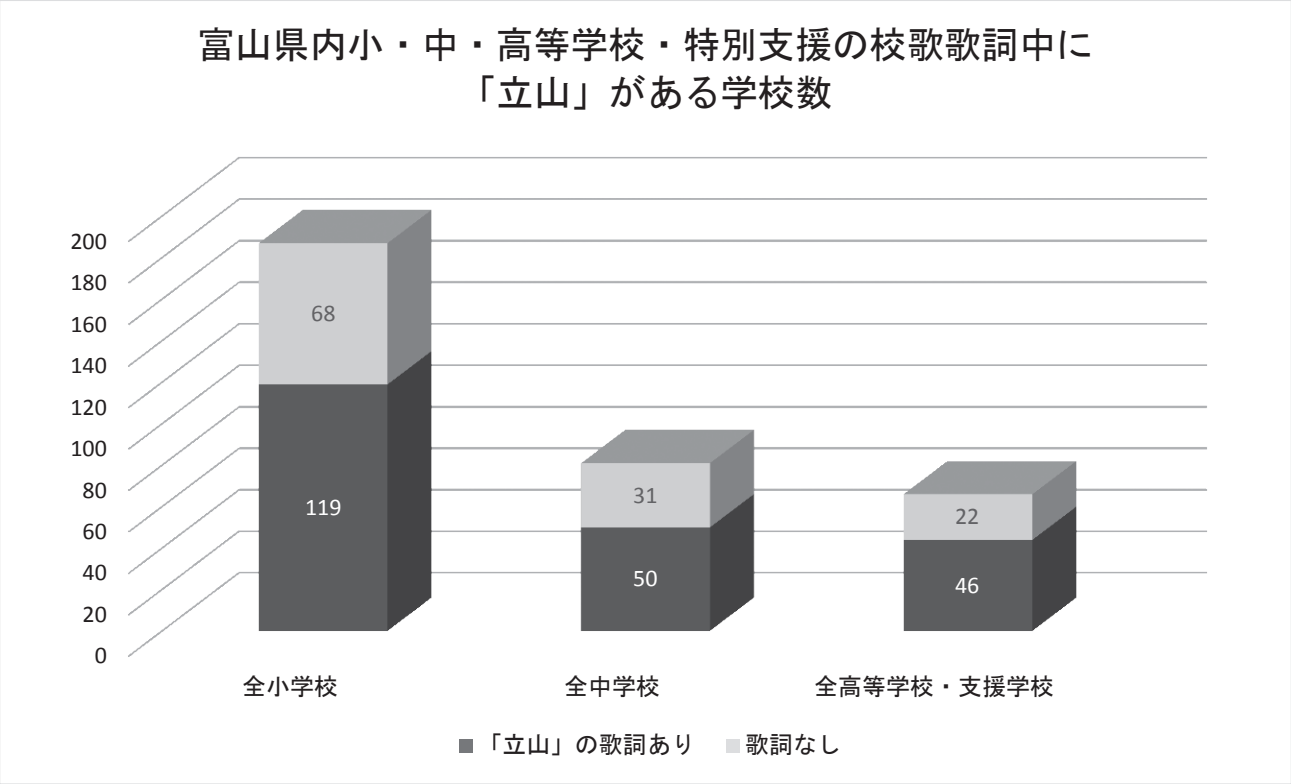
（3）小澤達三『富山県校歌全集・余滴』（パラマウント社、1979年）39頁。

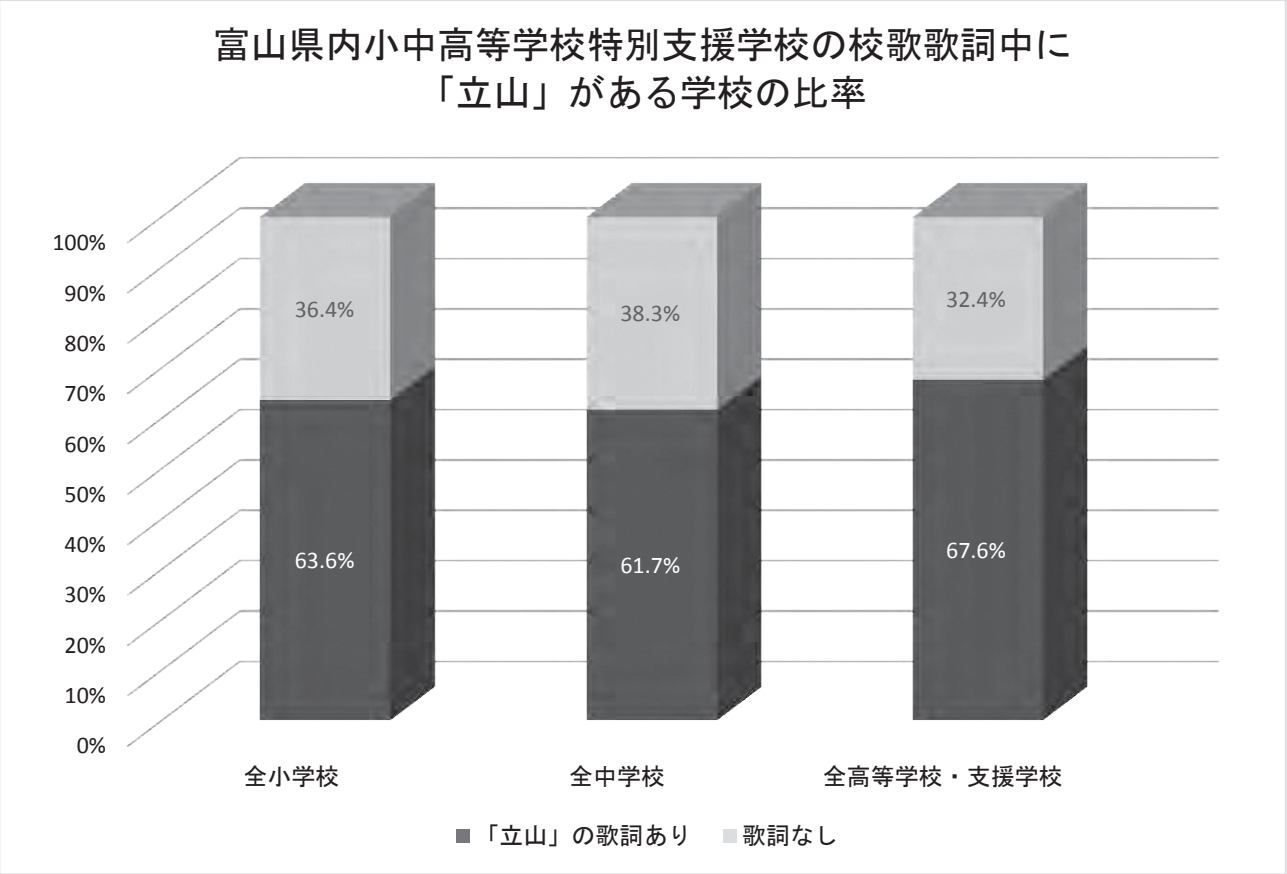
（4）朝倉隆太郎『山と校歌－中学校校歌にうたわれている山地』（二宮書店、1999年）。
嘉藤翔大「校歌に謳われる景観と地域イメージ」（『自然と社会』82、2016年）21～30頁。
石川貴士「小学校校歌にみる福岡の環境イメージ」（『環境システム研究』21、1993年）257～263頁。

（5）富山県芸術文化協会編『富山県芸術文化人名鑑』（北日本新聞社、1992年）。
小澤達三『富山県校歌全集・余滴』（パラマウント社、1979年）144～145頁。

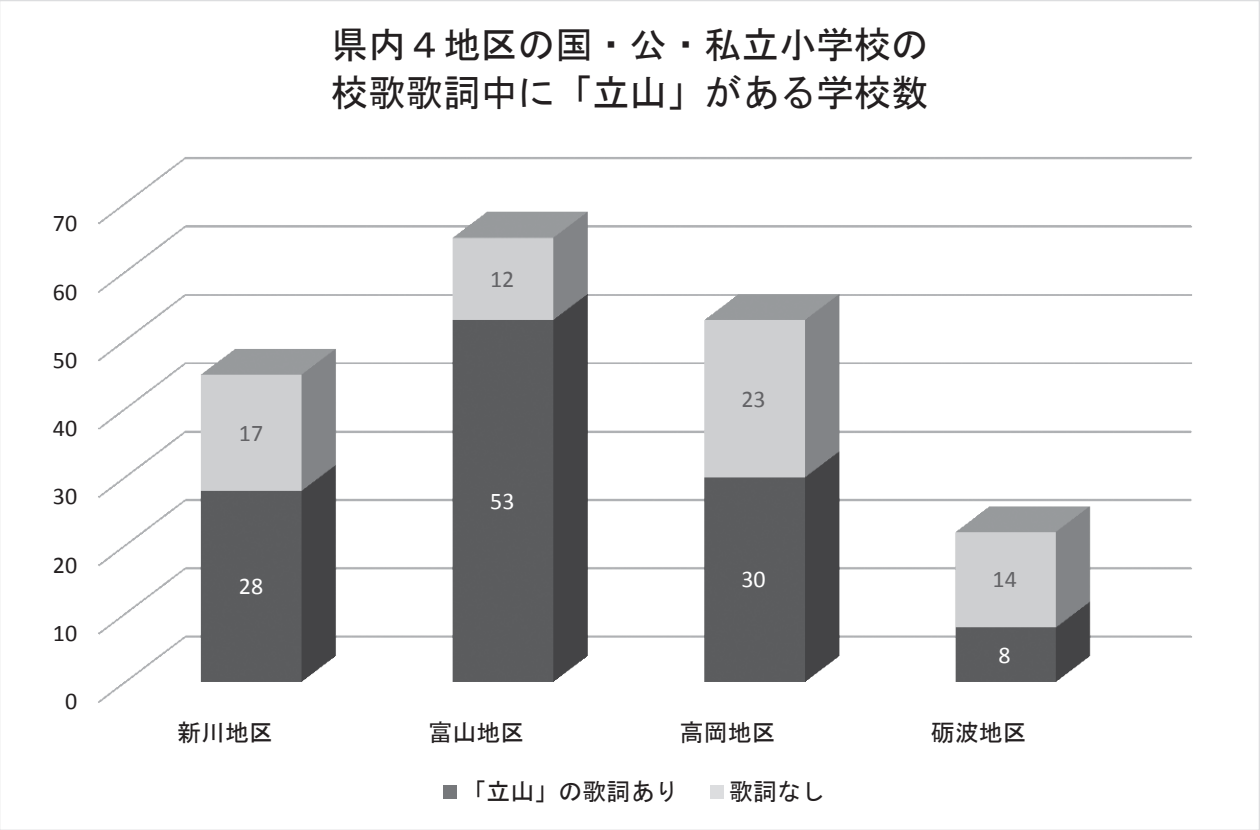
上記堀江氏論文127頁～129頁を参考に作成した。
（６）大島文雄著『萩咲きぬ』（大島文雄、1979年）57～58頁。
（７）大島文雄先生追想録刊行会編『大島文雄先生追想録』（岩波ブックサービスセンター、1992年）199頁。
（８）小澤達三『富山県校歌全集・余滴』（パラマウント社、1979年）171頁。
上記堀江氏論文126頁～127頁を参考に作成した。
（９）小澤達三『富山県校歌全集・余滴』（パラマウント社、1979年）159頁。
上記堀江氏論文129頁～130頁を参考に作成した。
⑽ 上記堀江氏論文129頁～130頁。
⑾ 富山県教育会編『きょう土のすがた　富山県』（富山県教育会、毎年４月発行）。
⑿ 郷土史・日本史教材作成委員会編『高校生のためのふるさと富山』（富山県教育委員会、2013年）。
⒀『小学校学習指導要領解説　社会編』（東洋館出版社、2008年）。
⒁ データは富山県教育委員会による。

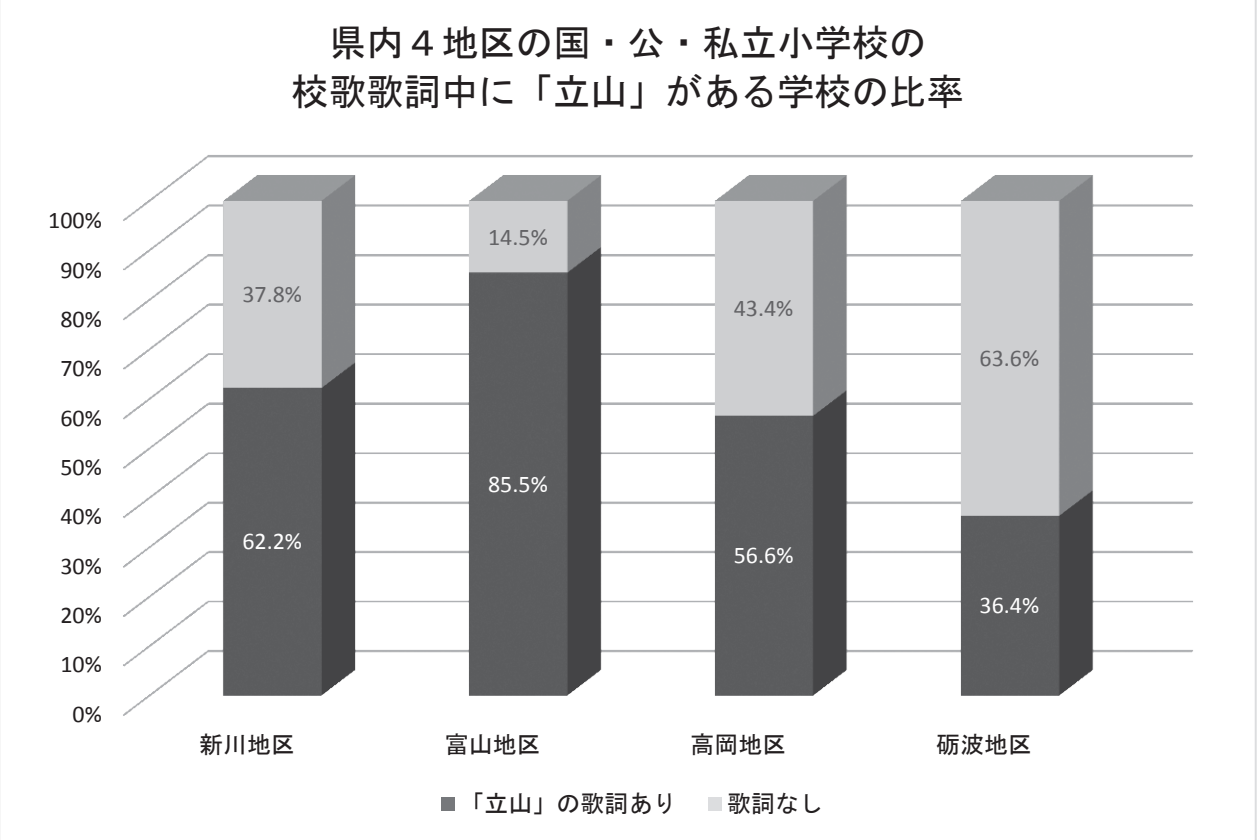
1．富山県内小・中・高等学校・特別支援学校の場合



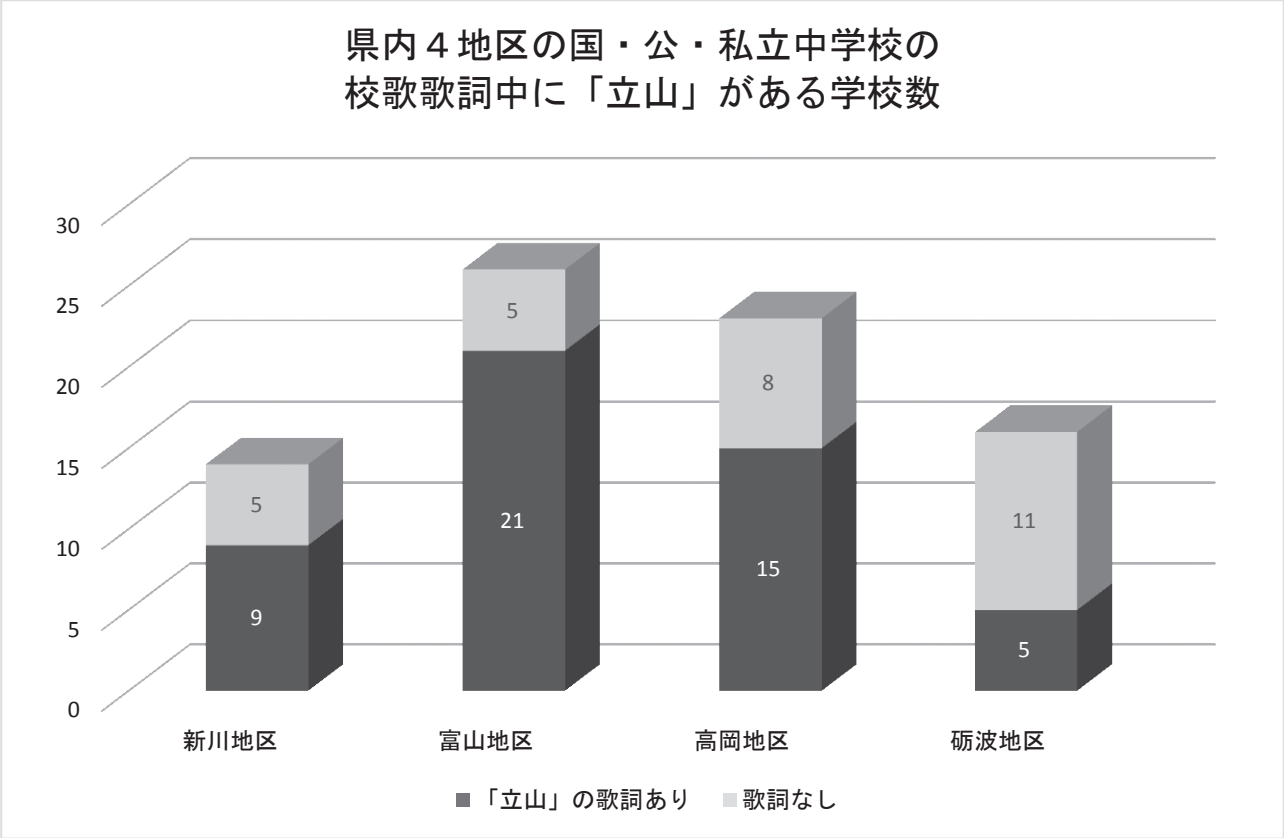


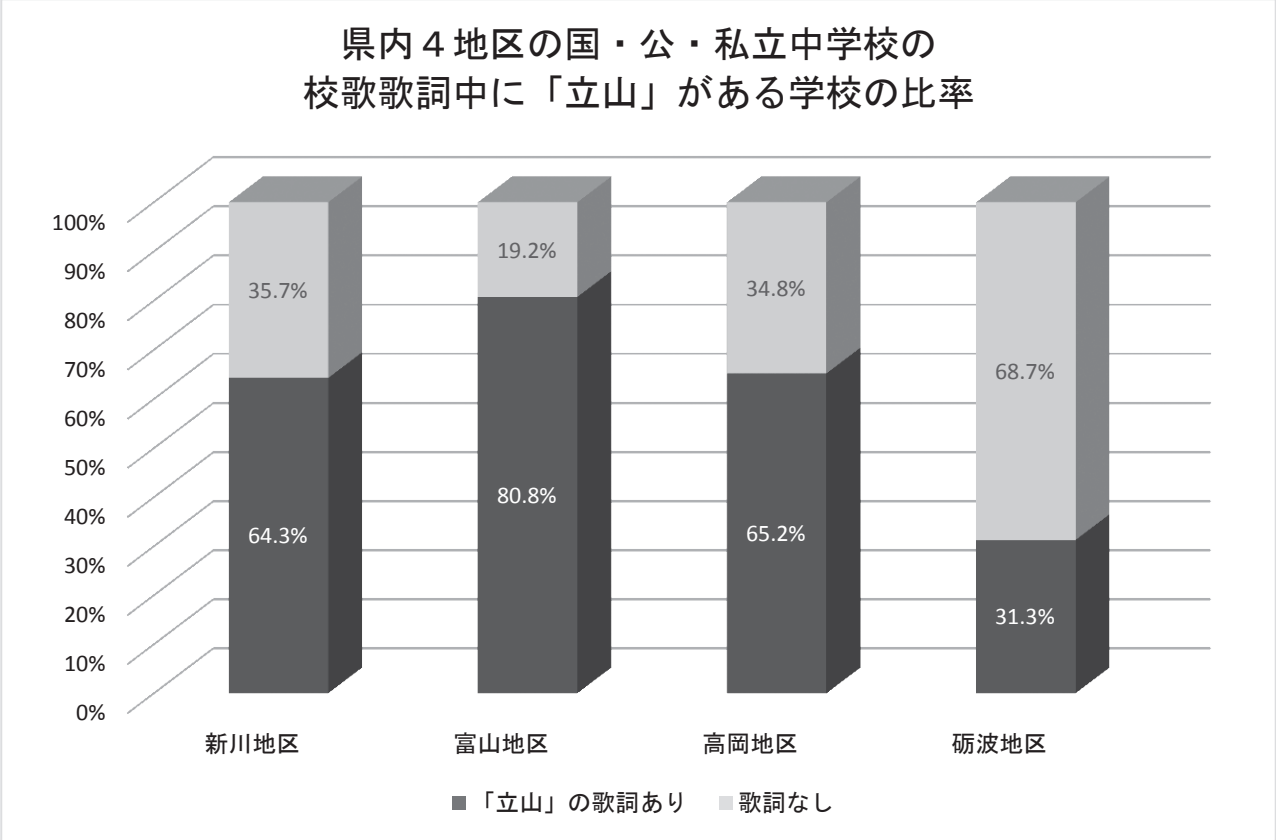
2．県内４地区の国・公・私立小学校の場合



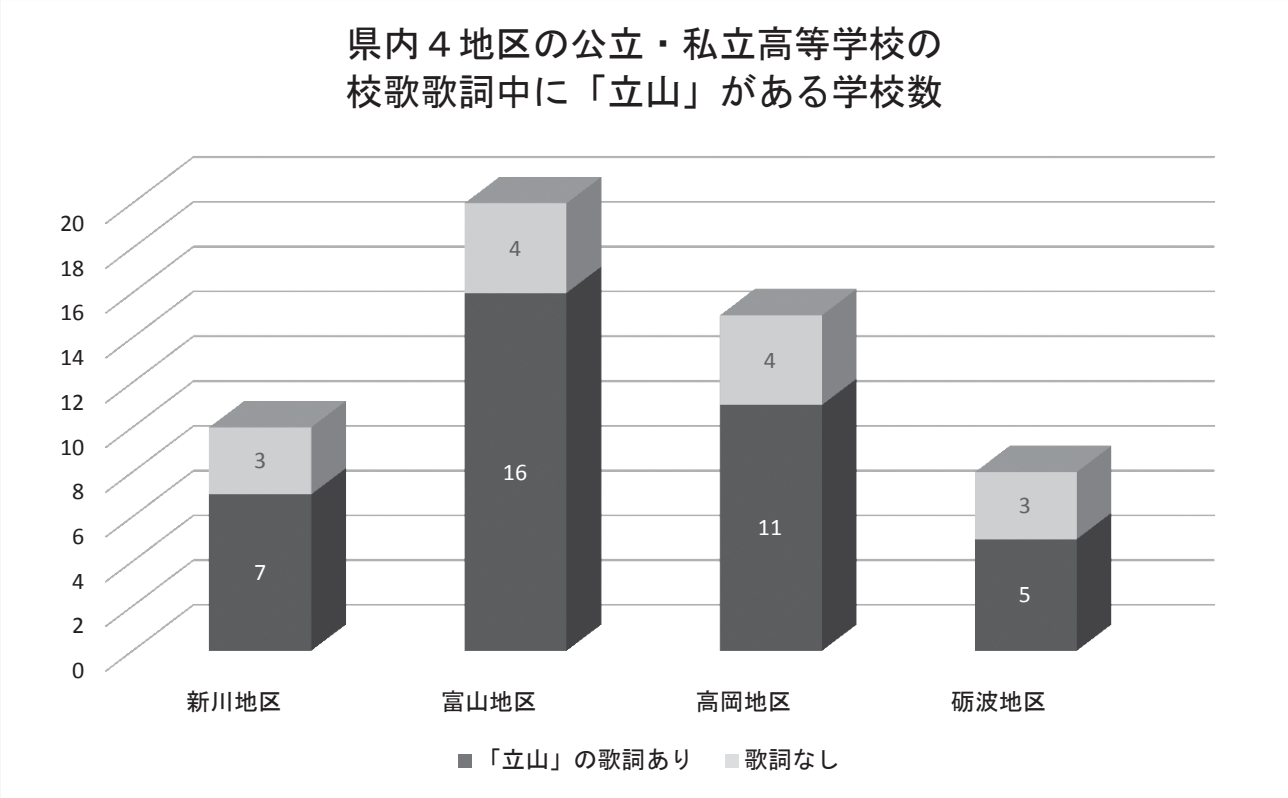


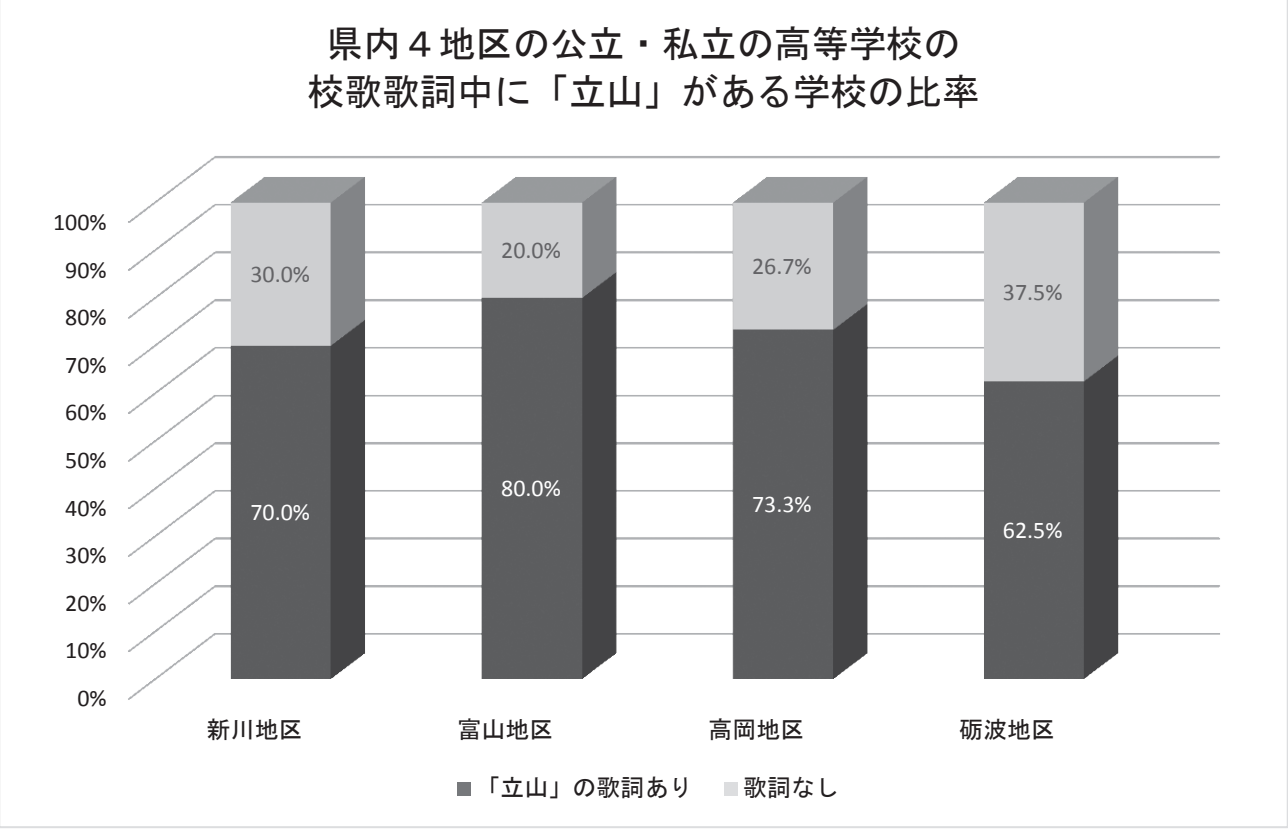
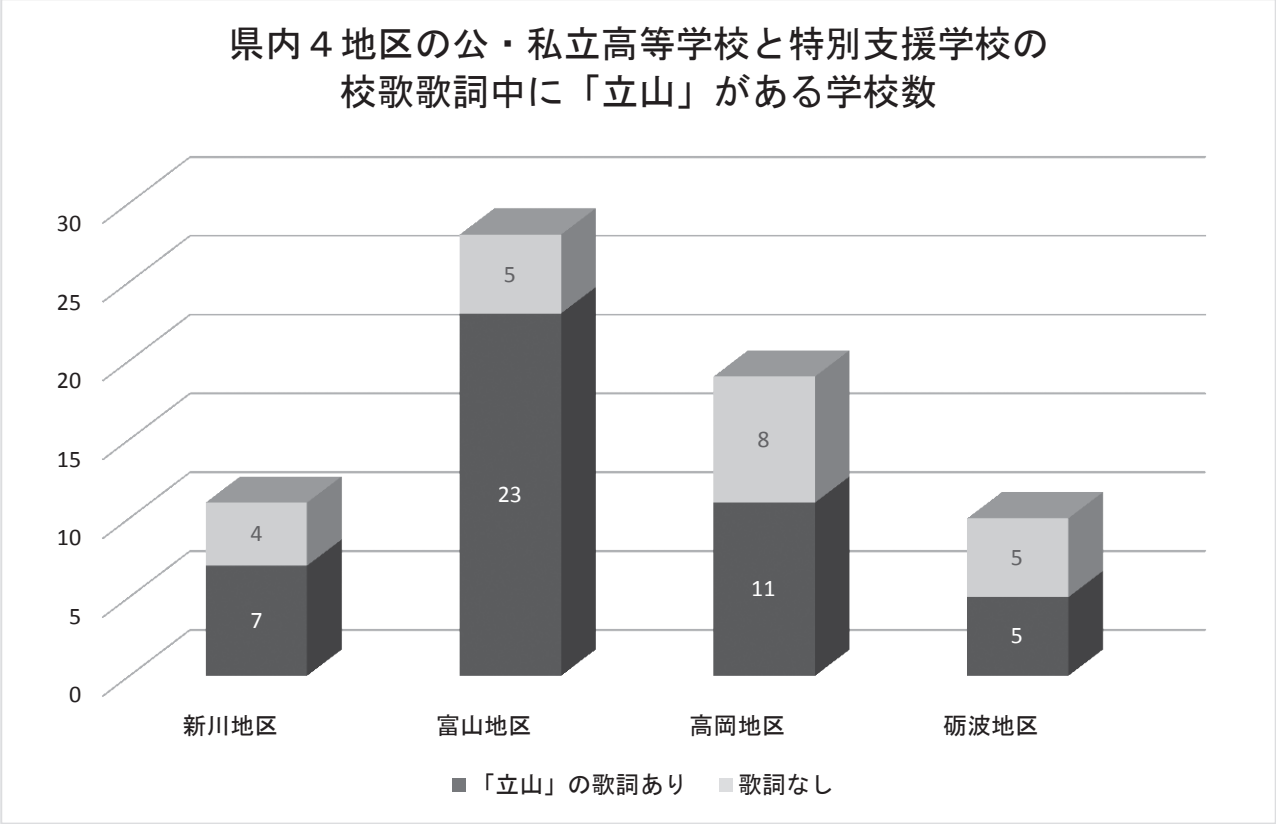
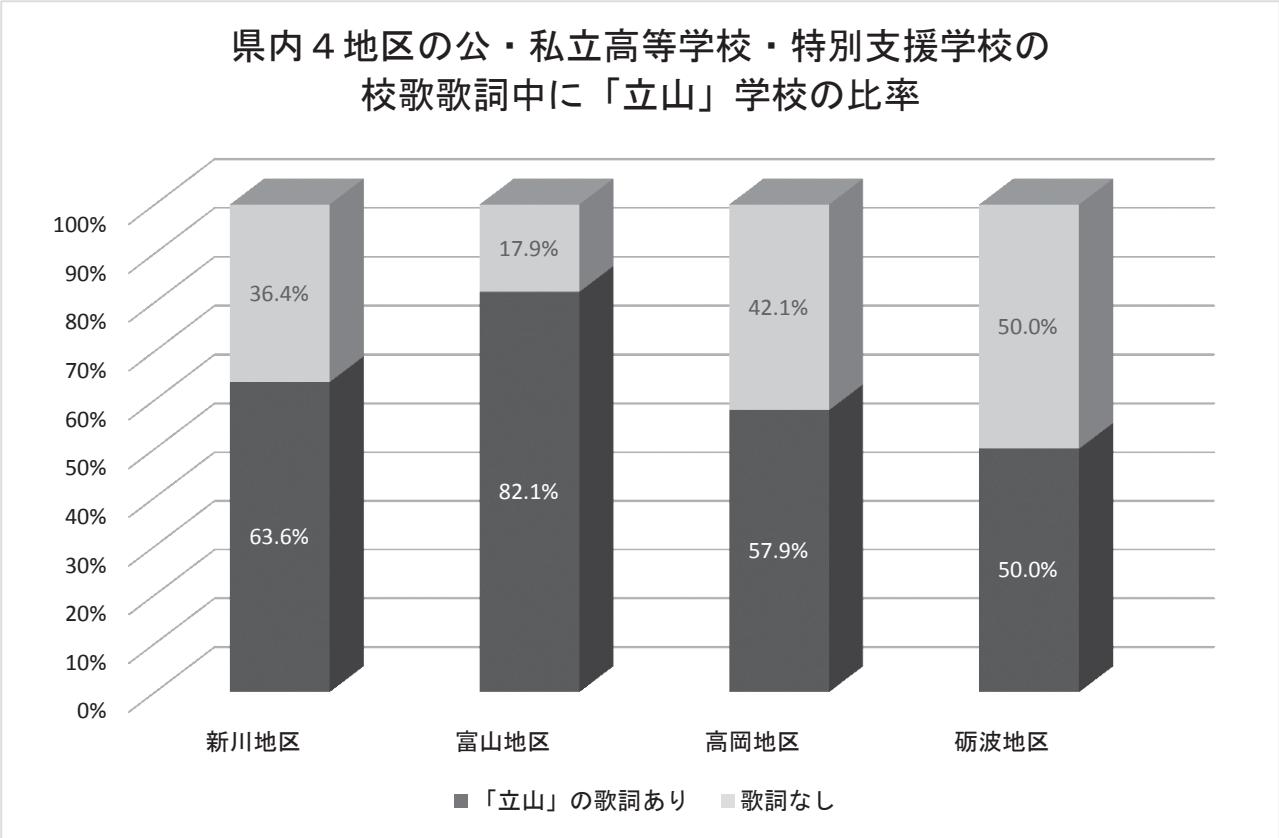
3．県内４地区の国・公・私立中学校の場合





4．県内４地区の公立・私立高等学校の場合





5．県内４地区の公・私立高校と特別支援学校の場合